

第1回いくしあオープン会議 発表まとめ

(Aグループ)

子どもファーストの地域づくりのためには、「自分を気にかけてくれる人がいる」「自分のしんどさを分かってもらえる」と子どもが思えるような寄り添える人が専門家だけではなく地域や学校や色々な所に増えていくことが大事です。そのために感度を上げていく必要があるという話が出ました。

また、例えば子どもを虐待してしまったり、傷つけてしまった人を社会に復帰させるような取り組みもすごく必要ではないかという話がありました。そして、いくしあは、みんなが癒される場所であってほしいという意見もありました。

(Bグループ)

いくしあは、子どもたちやその親の情報が入る場所なので、支援に当たって共有する必要がある内容は共有しても、きちんと情報をクローズしてほしいです。保護者は「どこまでが知られているのか」と心配になるので、どこまで共有するか分かるようになればと思います。

いくしあの職員の「出来る、出来ない」、「得意、不得意」を正直にはっきり伝えることで関係機関も動きやすくなるのではと思います。このチームでは「負担が集中しない」というフレーズがありました。やはり、いくしあで働いている職員がしんどい思いをしているとマイナスなイメージを持たれると、なかなか良い場所にはなりません。負担が集中せず、良い意味で色々な方々とつながれたらいいなと話していました。何とかしてくれると思っていくしあに来所されますので、「私たちが出来るのはここまでです。」と言われると「せっかくここに来たのに何ともしてくれないの？」というがっかり感はずごく残念ですので、何とかしてもらえる場所にしてほしいです。あとは、いくしあの職員も来所した方も嬉しくなるような、みんなが喜べる場所になればと思いました。

(Cグループ)

私たちは、民間の支援をしている方と現場の仕組みをつくっている方がいるグループでしたので、人に寄り添いながら組織として支えていくにはどうしたらいいのか、やはり最終的には子どもを大事にしていきたいと共通理解を話したところです。

そして、いくしあは小さな支援であっても、誰に対しても型にはまらない敷居が低くて来やすくなる事業をたくさん実施してください。あと、多文化共生の問題です。私は学校コーディネーターをしているのですが、同じ問題が出ています。文化、宗教や男女共同参画等の視点や性の多様性といったところをいくしあでどう守って支えていくかという話もありました。

他に出た意見としては、いくしあにはみんなに来て欲しいし、忘れられないですずっとあり続けてほしい。また、「いくしあキッズくらぶ」をひと咲きプラザ全体でつくったらどうか

と話もありました。「いくしあサポーターくらぶ」という大人や仲間たちの家族会といったゆるい小集団がいて、子どもたちが中心になって何か取り組めることができるようになれば、子どもの自信になったり、地域とのつながりをつくっていけるのではと思います。ただ、武庫地区は遠いという意見もあったので、いくしあをモデルにして地域が「うちでもやってほしい」となればと思います。遠いところに住んでいる方には土日専用バスを運行している地域もあるので、いくしあがモデルとして成功すれば、どんどん広がっていくのではとなりました。

(Dグループ)

やっぱりいくしあは「ネットワークが大事」「人があったかくて、支えがある所になってほしい」という意見がありました。ただ、少し心配なのは、総合的な支援をする場所であれば、非行問題とかそういうところも出てくると思います。非行問題関係は、あまぼーとやアマブラリで取り組まれるとのことですが、あまがさき・ひと咲きプラザ全体として、子どもを支援してもらえればという話が出てきました。

また、助けてほしいと声を出せない人をどう救っていくかについては、地域で活動している方や団体がいらっしゃるので、つながりを大事にしないといけないと思います。いくしあは、「行政の施設です」ではなく、市民から「私たちの施設だ」と思ってもらえるよう、もっと地域に入っていく必要があります。そのためには、行政も地域の方もお互いがどんな活動をしているのかをしっかりと知る場、いくしあオープン会議のような共に知り合う場を何回も持って、つながっていきたくらいと話をしました。ただ、やっぱり「最後は人だね」という話になりました。

(Eグループ)

「いくしあは、特別な場所にならない」というキーワードが1つ出ました。支援が必要な子やその保護者は、すごく人の目を気にして普段暮らしているので、「そこに行く人は何かある」と思われることを一番気にしています。いくしあがそのような場所に思われてしまうと、なんのために開設したか分からなくなります。プライバシーや個人情報に関してはきちんと管理する必要がありますが、特に課題がない子どもであっても、関わられるような機会や雰囲気はいくしあにあれば、色んな人がいる中に凸凹を持った子がいたり、親もいたり、柔らかく受容出来るような場になったらいいなと全体の意見として出ました。

また、保健所との連携をとにかく強化してほしいと思います。保健センターは3歳児までの親子の情報を持っているので、人的な連携や情報共有をしっかりと、本当に切れ目なく、ひとりも取り残さない機関になれば嬉しいです。

(Fグループ)

いくしあは来やすくて相談しやすい場所ということですが、子どもだけではなく、例えば

学校の先生が、こだわりが強い子どもがいた場合に、いくしあにご連絡すれば、学校を通じて子どもたちの支援につながるような仕組みを作っていただきたいなと思いました。

次に、いくしあで子どもを支援いただくに当たり、「ここまでしか支援できません。」と決まった支援をするのではなく、子どもの権利の中に発達に対する権利がありますので、阻害しないように徹底的に支援していただきたい。

また、市民も参加が出来る形にしてほしい。急に「あれやってください」ではなく、一体何が出来るかについて、色んな意見を共有してつながれたらいいなと思いました。

(Gグループ)

私が発達障害児の親だということから、保育園や幼稚園等の場所で子どもの育ち支援センターにペアレントトレーニングの出前講座をお願いできないかという話になりました。相談したくても心理的なハードルを感じる方はいらっしゃるのでは、ニーズをどうやって掘り起こそうかと考えたところ、「ペアレントトレーニング」という講座名を付けると、お母さんたちの心理的なハードルが下がるのではないかと思います。子どもの育ち支援センターの職員が子育てに関するアドバイス等をした後に、育児で困っていたり、子どもの発達に心配のある方はどうぞ相談に来て下さいと案内することでニーズを掘り起こせるのではという話になりました。

私たち発達障害児のお母さんたちは、みんな謝り倒して疲れ切っているのです、そういうお母さんたちの息抜きの場としてカフェがあればいいなとなりました。また、土に触れる体験はすごく大事なので、畑があれば、子どもたちを連れて行きやすいと思いました。

後は、お願いですが、障害児はスムーズに動くことが難しいので、自転車置場とバギー置場については、お母さん方が使いやすいようにして下さい。また、このバギー置場は一体何個置けるのかが気になりました。

(Hグループ)

このグループは、いくしあの職員、いくしあ以外の市職員、支援に携わる方や当事者という構成でした。また、フィリピン出身の方やご主人がハワイ出身の方もいらっしゃったので、色々な価値観で話し合いを出来るとても素敵なグループだったかなと思います。

まず、そもそも連携そのものが難しいという話になりました。やはり、支援に携わる方の得意・不得意を知ることが大事だと思います。それぞれ支援に携わる方々は、「支援の内容が被るのではないか」「共存出来るのか」みたいな不安もあるという話も出ましたので、いくしあはそれぞれの得意な支援を持ち寄れるような所だったらいいなとなりました。また、いくしあ自体が情報の集約される場所になるので、子育てに係るどんな情報でも「いくしあに行ったら何か分かるかも」という場所にできれば、誰でも来やすくなると思います。

あと、多文化共生ですが、様々な母国語や異文化の方がおられるので、「SMILE（スマイル）」と「Alohaの気持ち」を大切に、「その言葉を話せる方を知っている」と紹介した

り、みんながつながって協力し合える施設になったらいいという話も出ました。

(1グループ)

子どもの育ち支援センターが施設へ訪問する施設支援事業に取り組んでいくとのことなので、保育所（園）への訪問等に力を入れてほしいと思います。行政は、保育所（園）に子どもを入所させっぱなしですが、保育士は集団から外れてしまう子の対応等でとても疲弊しています。ただでさえ、保育士が足りない状況です。

その中で、子どもの育ち支援センターは、施設支援事業として保育所（園）へのアウトリーチを進め、保育士がしっかりと子どもに向き合えるような支援をしてほしいと話をしていました。

子どもの育ち支援センターのみでの対応が難しい場合は、やはり地域の事業所等の力を借りる必要がありますし、子どもの育ち支援センターに投じる予算もとても大事になってくるので、こういったところに予算を使ってもらいたいなと意見が出ました。

以 上